
猫の手紙

サシミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の手紙

【コード】

N8005C

【作者名】

サシミ

【あらすじ】

出演【俺と黒猫】猫が話す？ありえないって思った人には読んでほしいです。だってさ、これは物語なんだから

猫 1

あるとき黒猫を見た。とても小汚く、どこまでが汚れで、どこまでが地肌なのか分からない。

それでもその瞳は、どこか不思議な力を宿していた。

とても力強く、人間の俺が恐縮してしまうような眼力。

俺

「……………」

猫野郎

「……………」。「睨み合う俺と猫。どこか、牽制しあっている。もうすぐ秋から冬になる。ブルッと震える二人(?)」

俺

「……………寒い？」猫野郎

「……………普通」うん？シャベッタような気が…。いやいやいやいや、まさかね。あるわけないよ。あるわけない！

俺

「…寒い？」

猫野郎

「しつこいんだよ。人間野郎」
「……………!!!????????」

あれ？普通に喋ったぞ。コイツ

俺

「話せる？つてか、言葉分かるの？つてか、なんで？」

猫野郎

「ウルサイ」

そう、言い残すと俺の前から去って行こうとする黒猫。尻尾がクルっと回る。

俺

「……………メスカ」

猫野郎

「……………」少し振り返って、俺を威嚇した。結構離れてはいるものの、その視線の厳しさは俺の心まで突き刺さる。

その日、ベッドの上でダランとしながら色々と考えてみた。

あの猫のことを。

もしかしたらこれってかなりレアじゃね？…とか思ったりした。テレビ局が食いつく <売れる <俺に金入る <嬉しい
幸せの輪廻。

俺

「ハハハ」

不気味に笑う俺の声が夜風に溶けていく

……………探すか。あの猫。

ベッドから飛び降り、狭いアパートをぶっ壊すように豪快に出た。
俺と猫が会った場所へと向かった。

俺

「……………」

……………ガサガサ、……………ガサツ！？

俺

「……………」

あの猫か！

白猫

「にゃーにゃー」

俺

「失せろ！」目を血走らした俺が猫を睨む。逃げる白猫。去る際にモザイクがかかるものを俺の足下に残して……………

猫2

何時間探しただろうか……………。

暗闇を優しい朝の光が切りさいていく。

正直、俺は諦めかけていた。もう、喋る猫などさほど興味はなかった。ってか、本当にそんな猫はいたのか…

俺

「……………」

頭がボ　とする。眠気だけではない、寒気も感じた。どうやら俺は風邪を引いたらしい。まあ、当たり前と言ったら当たり前だ。一晩中、寒空の下で動き回っていたのだから。

目が自分の意識に関係なくだらしなく下がってくる。まるで俺……
…死ぬみたいだ。

俺

「くだら……ねえ」

最後に耳に聞こえてきたのは、自分の体が地面に倒れる音だった。

……………。

夢を見た。

とても懐かしい夢。

でも凄く嫌な夢。

どいつもこいつも嫌

俺

「!？」

突然、何かに触れられた気がして目が覚めた。

猫

「……………」

なぜか、俺の顔をあの肉球でゴシゴシ洗っている。少し痛い。いや、

かなり痛い。隠された爪が顔に触れると激痛が走った。

俺

「何してる、バカ猫」

猫

「アンタのヤスリみたいな顔で爪研いでる」

俺

「やめろ」

猫

「……………」

止める気配は全くない。

仕方なく、ダルい体を起こした。少し退いた猫が残念（？）そうに俺を見つめていた。改めて見ると……………やはりただ汚らしいだけだ。

猫

「何よ、そのバカにしたような目は」

俺

「バカにしてるんだ」

猫の毛が逆立つ。

殺気を帯びた。

俺

「……………」

帰って寝よう

猫

「……………」

フラつく足で家を目指す。

猫

「……………」

なせか、俺の後を付いてくる黒猫。

俺

「……………」

無視して歩き続ける。

猫

「……………」

……………振り返る。

猫

「……」

少し視線を逸らす猫。

俺

「……………」

結局、俺の部屋（6畳）まで付いてきた。どいつもこいつも……………

……………嫌いだ。

猫3

家に入ってからしばらく考えた。この状況はなんだ？
この生け簀かねえ状況は…

そこら中から、食器の割れる音や何かの液体が零れる音が聞こえる。

俺

「……………」
我慢だ、我慢。たかが下等な動物ごときに怒ったら俺の品位が下がるってもんだ。

……………ガシユガシユ、ガシヤ……………ピチャビチャ

俺

「……………い……………」

……………ガシャン！（何か割れる音）……………ガリガリガリガリ（壁が傷つく音）

俺

「いい加減にしゃがれえ！この猫野郎が。ここは、俺の城だぞ！好き勝手しゃがって」

はあはあはあ、疲れる。

猫

「……………分かった。お前、からかうと面白いからさ」

なんで俺がこんな目に……………ゴホゴホ、あつれえ

俺

「今から寝るから静かにしてるよ」
限界をとくに超えた俺は、そのまま寝てしまった。

……………まただ。

忘れていたはずなのに俺は、またこんな夢を見てしまう。

夢の始まりがあるのなら終わりはどこにあるのか。
早く俺はその終わりを知りたい。

.....春.....菜.....。

目を覚ます。寝ながら俺が泣いていたことを知った。

静かな部屋。散らかっていたあの部屋は、綺麗に掃除され整頓されていた。部屋の片隅で、丸まっている汚い猫が小さな寝息を立てていた。

お前が片付けたのか？まさかな。

寒そうに見えたその漆黒の体に毛布を掛けてやった。こつやっつて改めて見ると少し、ほんの少しだけ可愛かった。

服を着替えた俺は、外に出掛けた。

風邪薬とキャットフードを買うために。

自分でも信じられないことだが、俺は受け入れようとしている。この一人と一匹の生活を。

猫 4

薬局に寄った帰り道、たまたまカップルとすれ違った。

女

「ただの散歩も二人だと楽しいね」

男

「そうだねえ、ハハ」

.....アホか。

まあ...幸せなのは今だけだろうし、その幸せを噛みしめていればいい。

皮肉ではない。羨ましいわけでは決してない。決して...。家に帰ると、もう猫はいなかった。

開けっぱなしにしておいた小さな窓から、この季節独特の落ち着く風が入ってくる。

自分の家に帰ったのだろう。猫は特に自立心が高いと何かのテレビで聞いたことがある。

キャットフードが入った袋を放り投げ、風邪薬を適当に飲んだ。テレビをつけ、つまらない番組を見る。

俺には親はいない。親も俺はいないものと考えている。

ブ　、　ブ　。

携帯のバイブが鳴る。この部屋にある唯一高価な物。

俺

「なんだ？」

男

「起きてたのか？珍しいな、お前が」

俺
「金ならないぞ」

男
「ハハハ。知ってる。今日あたり、また頼みたいんだ」

俺
「……………」

男
「まあ…いつも通りにやってくれたらいい。8時に、いつもの場所
で会おう」

俺
「……………」

男
「じゃあな」

この男と俺の絆は、他人より細く、親より深い。

夜、約束の場所に時間通りに行く。この仕事にとって大事なものは、
時間を守るということ。

今夜は、月も星も出ていない。消えかかっている街灯だけが目立つ。

この街に不自然な、高級外車が俺の隣に止まる。と、同時に中から
数人の男が出てくる。どいつもこいつも顔は笑っているが、そこ
には心はない。【作り笑い】と辞書で引けば、コイツらの顔が載っ
ているはずだ。

俺
「今日は、何人だ？」

男
「三人だ。まあ話は前もってつけてあるし問題ない。タケルは、い

つも通りにやってくれたらいい」

俺

「……………」

タケル…俺の名前だ。名前など普段呼ばれないので、妙に違和感がある。

名前があるってことは、俺も一応人間だってことだ。

住所の書かれたメモ用紙とカバンを受け取る。

俺

「金は？」

男

「俺は、お前を信用してる。信用してるが、金はお前がしっかり仕事をした後だ。でも心配するな、金はしっかり届ける」

車が去った後に、俺はゆっくりと歩き出した。三人がいる場所は、さほどここから遠くない。今夜の仕事は早く終わりそうだ。

視線を感じた。背中に。それが人ではないことは分かったが、俺はワザと振り返らない。

なんでかな。

見られたくなかった。ただ…それだけ

猫 5

三人に会った。顔には生氣はない。ただ、ヘラヘラ笑っているだけ。中には、俺を見て舌を舐める女もいた。

早く終わらせよう。カバンを三人に渡す。

俺

「中身を確かめろ」

不気味な男

「うんうん、いいね。いい感じだ。ただ、量が少ない気が…。だろ？」

不気味な女

「そうだね。うみやゝ、はあはあはあ。ま…あ…仕方ないよお。君に言っても仕方ないしい、可哀想。ね？」

何が、ね？だ。ふざけやがって。

俺

「また、宜しくな」

三人

「……………」

三人とも俺には興味がなくなつたらしく、カバンの中身をいじくり回している。その目は異常な光を宿し、凶暴な猿のようだ。アパートに帰ると、玄関の前に、封筒が置かれていた。中身を見ると、キツチリ5万円が入っていた。

俺

「勝手に部屋に入りやがって…」

薄暗い部屋に虚しく声が響く。

電気もつけないまま、俺はベッドに横になった。腹はすいていたが、今は胸が何かでつかえ、食べる気はしない。

今頃、あのバカ三人は夢の中か……。奴らは気づいていないだろう。地獄に足を踏み入れてることに。まあ俺には関係ない。

窓から風が入る。その風が一瞬何かに遮られ、部屋に何か飛び込んできた。

俺は、起き上がる。暗い部屋に青白い目が光っている。

猫

「……………」

俺がしたことを一部始終見てたのだろうか、この猫は。

俺

「腹が減ってんなら、キャットフードがあるぞ？」

猫

「……………」

部屋の電気をつける。

俺

「食いたかったら言えよ」

猫

「……………」

俺は、また横になる。目をゆっくり閉じた。

猫

「アンタは、今のままでいいの？」

俺

「……………」

ふふ、面白い猫だな。俺に説教する気か？

猫

「夢に逃げてるのはアンタだよ。タケル」

……………俺……………分

かってるよ。そんなことは

猫 6

……………記憶。俺がまだ僕だった頃の話。

誰かが僕を呼んでいる。

まだ眠いのには……………。

【早く起きなさい】

僕

「う…ん。だあれ？」

女

「私のこと忘れたのかな。このネボスケは」静かに笑っている。

僕

「春菜…ちゃん？どうしてここにいるの？」

春菜

「それよりも、遊びに行こ！タケルちゃん」

名前を呼ばれただけなのに、なんだか嬉しくなった。春菜ちゃんは、確か……………僕のお家の近くに住んでいた女の子だ。僕とたいして年は変わらないのに、とても頭が良くて、背も僕より高かった。たまたま知り合った僕たちは、親友と呼べるくらいに仲良しになった。

僕

「今日は、どこで遊ぶの？公園か……………えっと……………」

いつもは公園で遊んでいたが、今日は天気が悪い。太陽も雲の中に隠れている。

春菜

「私ね、秘密の場所を見つけたの。タケルちゃんは、特別だから教えてあげるね」

【特別】と言う言葉になんだかドキドキした。

僕と春菜ちゃんは、二人仲良く手を繋いで歩いていた。今にも雨が降り出しそうな天気だったが、それでも僕たちは笑っていた。ちよつと春菜ちゃんのお家を横切るように歩いていた時、春菜ちゃんの手が固くなったのを感じた。僕は少し心配になった。

僕

「大丈夫？」

春菜

「大丈夫だよ。うん、心配してくれてありがとうね」
その顔は、少し強張っていたがそれでも笑っていた。……………

……………

僕

「まだ着かないの？結構、歩いたから疲れたよ……………はぁあ」

春菜

「もう少しだから頑張ろう？着いたら、一緒にジユ　又飲もうね」

僕は、正直少し後悔していた。こんなに家から離れた場所に来たこととはなかったし、夜がジワジワと迫ってきていたから…。そんな嫌な想像ばかりしていると……………

春菜

「着いたよ、タケルちゃん」

嬉しそうに春菜ちゃんが言う。僕

「?????ココなの？」

そこは、ただの草原だった。特に何もない場所。ここが春菜ちゃんの秘密の場所？

僕

「……………」ガツカリしていた。期待していたから…。

春菜

「なあに？その顔。ガツカリしたのかな」春菜ちゃんは、僕の顔を覗きこんだ。ニヤニヤと怪しげに笑っている。ポケットから何かを取り出した。

僕

「？」何かな。アレ。

春菜

「タケルちゃん。私ね、見えないものが一番美しいって思うの。だから、この場所で練習してたんだ」

小さな雨の子供が顔に当たった。それでも僕は、目の前の光景に釘付けだった。夜に見る夢を起きてる時に見たのは、これが初めてだった。

猫7

懐かしい夢。俺は、あの時何を見たんだ？どうしても思い出せない。春菜が笛のようなものを吹いていたのは覚えているが、その先が……。俺って、こんなに記憶力悪かったっけ。……少し悲しくなった。

猫

「……暇」

黒猫の横には、食い散らかした缶詰めがある。行儀レベルは、最低だ。話せるということを除けば、コイツもただの猫。

俺

「お前、汚いな。洗ってやるよ」

正直、このまま歩き回れたら部屋が余計に汚くなる。

猫

「シャ〜シャ〜」

怒ってる。

俺

「……じゃあ、タオルで拭いてやる」

俺は濡れたタオルで黒猫の体を拭いてやった。その間、何度となく爪で引っかかれ、俺は傷だらけになる。……数時間後、黒猫は綺麗になる。汚れの落ちたその体は、どことなく品があり、……高く売れそうな気がした。

俺

「……」

猫

「守銭奴のような最低最悪な目つきしてるな、タケルは」
売る計画がバレた。

テレビからニュースが流れている。俺には関係のないツマラナイものばかり。

交通事故？

不正融資？

離婚？

……………眠くなる。

猫

「……………」必死に猫は、ニュースを聞いている。もしかしたらコイツは、こうやって人の言葉を覚えたのかもしれない。……………な、わけない。

俺

「前にも聞いたけど、なんでお前は話せるんだ？」

猫

「……………」
やはり答えない。

俺

「じゃあ、……………じゃあ……………」

まあ、どうでもいいか。そんなこと。

猫

「タケルは、なんであんな仕事してる？」

俺

「なんでかな」

テレビ以外の音は聞こえない。とても静かな夜だ。

猫

「アンタ……………近いうちに死ぬよ」

俺は、テレビ画面を見たまま考える。俺は、死ぬのか？……………俺の勝手だろう。これは俺の命なんだから。バカバカしい！……………

俺

「さっさと寝ろよ、バカ猫」

「お前がな」

……………憎たらしい。

テレビを消し、寝る。

無意味に睡眠薬を飲む。この癖は、なかなか直らない。昔から……………。

【シナせない】

そう、聞こえた気がした。

猫 8

AM10時 電話である男に呼ばれた俺は、喫茶店にいた。時間通りにソイツは来た。

男

「客は、満足してたか？」

俺

「まあな」

この男は、賢治……………名字は忘れた。

賢治

「お前さ、いつまであんな生活続ける気だ？いい加減、こっちに」

俺

「俺の自由だ。そこまで介入するなよ、賢治」

賢治

「……………」

喫茶店と言う楽しい場所からは想像も出来ない話をする二人。

賢治

「親父がさ、お前を欲しがってるんだよ。一度でいいから会ってくれないか？…な、頼むよ」

俺

「俺はさ、今のままで満足してるんだ。だからさ、それは無理」

どこかで聞いたことがある曲が店内に流れる。良く見ると、学生服を着ている奴や子供連れの主婦が多い。

俺

「……………」

賢治

「……………」

せつかく頼んだコヒが冷めていく。アイツなら喜んで飲むかな。猫舌だから……………。

俺

「話はそれだけか？そろそろ帰るよ」

賢治

「……………ああ」

駐車場には、一際目立つベンツがあった。あいつの車だ。中には、数人の男がいる。俺の姿を確認すると、軽くお辞儀をした。

俺

「……………はあ」

……………気疲れした俺は、アパートに直行する。部屋では、毛繕いをしている猫が一匹いた。

俺

「……………そういや、そろそろお前にも名前をつけないな」

猫

「！……！」

予想外にビックリした反応を見せる猫。

俺

「マリモとかどう？」

猫

「……………」

何か考え込んでいる。

俺

「……………じゃあ、猫美ねこみは？」

猫

「……………は……………」

俺

「うん？何か言ったか？」

猫

「はるな……………がいい」

この部屋だけ、時間が止まった。それは一瞬だったけれど、俺の思考はかなり長い時間止まったまま。

俺

「なんで、お前がその名前を知ってる？」

猫

「……」

俺

「答える！」

しばらくして、猫はゆっくりと言った。

猫

「なんか……好きなんだ。その名前……」

……俺

「……そうか。でもお前には似合わないよ。その……名前はさ」

その日、俺と猫はもうこれ以上の会話をしなかった。

お互いに話しかけたりしない。

ただ、偶然やっていた料理番組には両者の視線が釘付けになった。

猫9

その日は、朝からツイてなかった。俺が住んでるアパートの前でガス管設置の工事が始まり、…とにかくうるさい！

……………イライライライライラ。

俺

「あ〜うるせえなあ」

猫

「シャ〜シャシャ〜」コイツもキレてるらしい。

コイツの名前だが、結局決まらなかった。

俺と猫は、騒音から逃げるように外に出た。挨拶してきた道路整備のおっちゃんを睨みつけ、当てもなく歩く。……………歩く。ただ歩く。

猫

「この街も変わった…」

突然、猫が俺に話しかけてきた。

俺

「そっか？さほど感じないけどな」

猫

「……………あつそ」

……………歩いていて気付いたことだが、コイツの言葉は俺以外の人間には聞こえないらしい。これは、かなり都合が良かった。話す猫の存在がバレたら、騒ぎになるし。

街から抜けると、田舎の香りが強くなる。畑やら、川やら、田んぼぐらいしかない。

駅前に戻ろうかと思ったが、…たまにはこんなマッタリした時間を過ごすのもいいかもしれない。

俺

「……………」

猫

「……………」

まっ……………たり。

突然、俺の携帯が鳴る。現実に戻された。

俺

「はい」

賢治

「仕事を頼みたいんだ。……………忙しい？」

この状況で、忙しいとは言えない。

俺

「いや、大丈夫だ」しばらく話した後、電話を切った。最近、警察連中も街中をウロウロしてるからな…しばらく様子見たかったけど。

猫

「行かない方がいいよ。…てか、行くな」

恋女房かよ、コイツ（笑）

俺

「大丈夫だって。知らない仕事じゃないし、第一俺にはこれしか稼ぐ方法がないしな」

猫

「まだ分からないの？アンタは、ただの捨て駒だよ」

そんなことは、分かってる。それでも、やるしかないんだ。やるしか……………。アパートに引き返した俺と猫は、夜までボくと過こした。

時間になり、俺は部屋を出る。猫は、不自然なぐらい大人しかった。待ち合わせの場所まで行くと、もう車はあった。時計を見る。……………遅刻はしていない。

俺

「やけに早いな。そんなに俺に会いたかったのか？」

賢治

「ハハハ。まあそんなとこだ」

いつものようにメモとカバンを受け取る。そして、お互い別れた。

メモに書かれていた場所は、工場の跡地だった。そこに数人の男がいた。

男1

「おお来たか！待ってたぜ」

俺

「……………」

……………。何か違和感を感じた。

男2

「早くカバンの中身を見せてくれませんか？確認したい」

俺

「ああ……………これだ」

違和感は、確信に変わる。…………チッ

人間が死を予見する時、恐れたり、抵抗したりするらしい。でも俺は………。死を受け入れている。この世に未練はないから。

俺

「……………」
男の一人が銃を取り出し、俺を撃った。バン！……………いや、ズドン！だったかな。頭がボヤけて良く分からねえ。

俺

「ぐあ……………はあ……………」男たちに背を向け、俺は歩く。なんだ……………生きたいんじゃない俺。なんか格好悪いな。死ぬの嫌なんだ。へえ……………。

血がとめどなく、口から溢れる。
止まる気配はない。内臓から血がもれる度、目眩が激しくなる。もう、どこをどう歩いているのかも分からない。男たちの笑い声が聞こえる。

男1

「くだらねえ男だな。なんの価値もねえ」

……………死。

俺は過去に一度だけ、死体を見たことがある。殺された奴の顔はぼやけているが、殺した人間の顔ははつきりと覚えている。

俺

「はあ……………あ……………は」

地面に倒れる。

とても静かだ。

なんか、……………なんでかな。涙が止まらない。

地獄って、どんな場所だろう。

.....
どこかで子守歌が聞こえる。

とても安心する。

声が聞こえた。

【タケルちゃん、起きて】

それが誰の声か、すぐに分かった。

ゆっくりと……目を開ける。

俺

「ジゴクか？」

猫

「.....」

猫がいた。黒い猫。気品がある毛並みをゆらしながら近づいてくる。

ここは俺の部屋。

.....?????

俺

「どうなってる？」

ワケが分からない。アイツは、まるで猫のようになミャ〜ミャ〜鳴いている。

猫 1 1

ある人が僕に問う。

「君の宝物は何かな」……………分からない。

別の人が問う。

「君の夢は何かな？」……………分からないよ。

だって、僕には何もないから。でもね、こんな僕にも大切な人はいるよ。守りたい人、とても大事な人。……………その人は、今いないけど…きつといつか……………

【逢えるから】

俺は話しかける。何度も。

猫

「……………」

俺

「どうしたんだ？早く話せよ。憎たらしいこと言えよ、いつもみたいに」

猫

「……………」

猫は、窓から外の変わり映えしない世界を見ている。

……………。

俺

「はぁ……………何が」どうなってる？なんで俺は生きてる？なんでコイツは話さない？

携帯が揺れている。小刻みに俺に主張している。

俺

「……………」

賢治

「タケルか？どうしたんだよ、お前。約束の時間は、過ぎてるぞ」
約束？なんの話だ。

俺

「俺……………撃たれたんだ…死んだ…」自分でも、可笑しなことを言
つてしていると分かる。

賢治

「誰にだ！誰に撃たれた？」

俺

「お前が今日…紹介した客に」
疲れていた。頭が混乱している。

賢治

「…タケル？…あのさ、今日はまだ客は紹介してない。お前…」
何言ってるんだ。

取引しただろ？つい、さっき。あれから、まだ数時間しか経ってな
いはずだ。

賢治

「……………」

賢治は何かを考えている。

賢治

「お前、俺との約束は何時だ？今は、8時半。30分も過ぎてる」

ゆっくりと腕時計を見る。

俺

「……………なんだよ、これ」
時間が戻ってる？

なんで？

俺が生きてるのは、俺が死ぬ前に戻ったからなのか？ハハ、どうか
してる。俺の頭も限界らしい

俺

「ハはハハ……」

賢治との電話を切る。

今なら、神様の存在を信じられそうだ。そういや、無宗教だった。これをきっかけに、十字架でもぶら下げるかな。首とかにジャラジヤラと。

猫

「……………？タケル」

猫の方を向く。

俺

「早く話せよ、猫に独り言いう趣味はねえ」

猫

「……………それが、さ。なんか話せなかった。良く分からないけど……」
明らかにしょんぼりした様子。首がダランと下がっている。

俺

「まあ…仕方ないな」何が仕方ないのか分からない。言葉のキャッチボール失敗。二軍落ち。

狭い部屋の中に俺と黒猫。

こうして静かな夜は過ぎていく

猫 1 2

久しぶりに旅行に行きたくなった。場所なんてどこでも良かった。ただ、いつもみたいに部屋に籠もるのは耐えられなかった。

俺

「行きたい場所あるか？」

猫

「…へへ」

……海か。

まあ、行ってみるかな。

田舎電車に乗る。猫は、カバンの中に入れた。とても大人しくしている。

猫

「……………」

ジ

ジ

カバンからヒョッコリ顔を出した猫が外の風景を見ている。きつと、コイツにとっては見るもの全て新鮮なんだろう。

しばらく寝ようかな。どうせ、終点まで行く……し……………。

僕

「…ふああ。良く寝た」

春菜

「……………」

何故か、怒った様子の春菜ちゃん。

僕は、すぐに状況を理解した。謝る。

僕

「ごめんね、春菜ちゃん。ボク…なんか眠くなって…」

僕たちは、草原にいた。春菜ちゃんは、笛を吹くのを止めている。

春菜

「…どうだった？下手くそでごめんね」

春菜ちゃんも謝る。なんで謝るのか、僕には分からなかった。

僕

「うっん、凄く綺麗だった。上手かったよ」

正直、笛の演奏などさほど聞いていなかった。僕が見てたのは、春菜ちゃんの横顔と…雰囲気。

春菜

「本当？…良かった…あの」最後の方は、声が小さくて聞きとれなかった。

僕

「そろそろ帰ろう？春菜ちゃん」

二人仲良く手を繋いで帰る。

春菜ちゃんの手は、少し熱っぽかった。

僕

「さようなら。今日は、楽しかったよ。ありがとね、えっと……笛のやつ。ハハ、また明日！ね」春菜ちゃんの家の前で別れた。

春菜

「うん。さようなら。ありがとう、タケルちゃん」

離れてすぐに、何故か寂しくなった。春菜ちゃんと別れたからではない。僕には、触れられない存在になったと思えたから。もう…二度と。

メガネをかけた男

「何を見てるの？」

僕

「…昔」

もう戻れない昔。今だから昔。昔なら今。帰る場所は、あそこだけだったんだ。僕は、答えを知りながら選択を間違えた。

猫 13

駅から降りる。深呼吸。なんか、体が軽い。息をし易い。

俺

「どっちに行く？右か左か……」

どうせなら、運命と言うものに任せてみたくなった。

猫

「左」

……右に行くことにする。

猫

「左！ひ・だ・り」右に行くと、一人の子供に会った。まだ小学校低学年といった感じの背丈と顔立ち。

俺

「……………」

子供は、下を向いたまま、棒きれで蟻を潰していた。無表情に。

俺

「……………」

まあ……子供のすることだ。

猫

「止めな！そんなこと」

猫は、怒鳴った。初めて、本気で怒っているアイツを見た。

俺

「……………」

理解できるはずもない猫の言葉。少年の耳には、ただの雑音でしかないだろう。

猫

「生きようとしてるんだよ？必死に」

猫は、潰れた蟻たちを見ていた。一匹の蟻は、まだピクピク動いている。

少年

「なんで分かるの？そんなこと」

……………今、コイツ。

俺

「分かるのか？この猫の言葉が」

俺以外にもいたのか…そう感じた瞬間に、少年の影が濃くなった。

少年

「どうせみんな死ぬんだから。僕が今殺してもいいでしょ？」

猫が何か言おうとした瞬間に、俺が少年に話しかけた。

俺

「じゃあ、俺がお前を今殺してもいいんだな？」

少年

「……………」

光を宿さない目が俺を見る。どこか、俺の心を見透かしている。

俺

「…なんてな」

俺は、猫と一緒に先へ進む。少年とは別れた。

少年は、ずっと俺と怒り狂った猫を目で追っていた。

……………不思議なガキだ。

海沿いに歩く。夕方になると、海が淡く燃え、俺の目を紅く染めた。

あまり金はなかったが、野宿は嫌だった。

俺は、宿を探す。

偶然、一軒だけ俺たちを受け入れてくれる宿があった。

部屋に入り、電気をつけた。

これからどうしよう。……………さっき見た蟻の屍と俺の姿がダブル。今

夜は、とても冷える。

猫 14

ここに来てから数日がたった。

ここにいると時間の感覚が鈍くなる。

それなのに俺の生活リズムは、一定で。

居心地は、まあまあ良かった。猫も気持ち良さそうに昼寝をしている。

俺

「……………」

わざと畳を叩き、音を出す。バン！

猫

「……………？」

一度、面倒臭そうに顔を上げたがまたすぐに寝る。

…………… つまらん。

俺は、外に出た。この宿の主人は、本当に良い人で何かと俺たちの世話をしてくれた。まあ俺から言わせれば、甘い人間。足に罌がかかっていても気づかないタイプだ。

宿の主人

「いつてらっしやい！暗くなる前に帰ってきてくださいね」

…………… 俺は何歳だ？

しばらく歩くと、海の香りを感じなくなった。商店街をブラブラ歩く。…………… 歩く。

そうしていたら、あの不思議な少年を見つけた。どうやら、友達と一緒にようだ。……………？ 様子が少しおかしい。

少年 A

「…これでいい…ですか？あの…今はこれしかないんだ…」
不思議な少年

「…………… 約束したのより少ない。お前、ダメ」

受け取った金を捨て、足で踏みつけた。

少年B

「ぼ…僕は、きちんと持ってきたよ！ほら」

汗ばんだ手には、何枚ものお札が握られている。

不思議な少年

「……………」

お金を何も言わずに受け取る。

へえ…こんな田舎町でもカツアゲあるのか。

俺は、また歩き出す。少年たちを素通りする。

……………ドサツ！

少年B

「ひいひい！！」

短い悲鳴を上げた。

不思議な少年

「……………」

間もなく、少年Aも同じように倒れた。

不思議な少年は、何事もなかったかのようにその場を去った。お金

は、そこに捨てて。

俺

「……………」

振り返って見ていた俺と目が合う。

不思議な少年

「……………」

相手の目からは、何も伺うことは出来ない。ただ、ほんの少しだけ

俺の姿を瞳に宿す。

その目は、何百年もこの世界を見てきたように果てなく底が深い。

…この少年とはまた会う気がした。

猫 15

荷物を整理し、旅館を後にする。

猫は、ここ数日で少し太った。ここの緩やかな風土に……………。
次は、どうするかな。

俺

「どうする？」

猫に相談する。

猫

「働け。真面目に」

……………。

どうすっかなあ。

漁師にでもなるか？目の前、海だし。

ハハ。ないない。

仕事といたら、人には言えないことしかやってないしなあ

猫

「タケルはさ、夢はないの？」

夢…………俺の夢…………空を見上げてても答えは浮かばない。

俺たちは、バス停まで行った。

とりあえず、次のバスに乗り、考えよう。

自販機でジュースを買い、中身を容器に移す。猫は、ペロペロ舐めている。どことなく、機嫌が良い。

飲み終えた猫が話しかける。

猫

「タケルさ、……………今まで人を信用したことないでしょ？」

……………ハハ。

俺は缶を置き、髪をかいた。思い出す。

俺

「あるよ。過去にある。一回だけ」

お前には、特別に話してやる。お前なら……もしかしたら、乾いた風。

太陽は、どこまでも街を照らしている。平和な世界。

だけどさ、世の中には必ず例外が存在するんだ。光があれば、闇がある。光ばかり見ていると、闇を恐れるようになる。本当の光は、闇の中にだけあることに気づかない。

俺も気づかなかった。あの時までには。

7年前、俺は刑務所にいた。場所は、……今も分からない。そこに着くまで目隠しをされていたから。そこは、まさに闇の中にあつた。どっかの金持ちのバカが建てたらしいことは分かっている。

受刑者の中には、その場所を楽園と呼ぶ奴もいた。

……タケル……タケル。俺

「なんだ？また、具合が悪くなったのか？」

老人

「ああ……少し……ここら辺が痛むんだあ」

胸を押さえている。いつものことだ。だが、このままにしておくわけにもいかない。俺は、隠しておいた薬を老人に手渡す。

老人

「ありがとなあ。タケルさん。ありがとう」

俺とこの老人は、同じ牢屋の住人だった。

猫 16

朝起きて、点呼。そして朝食。点呼。午前の労働を終え、昼食。点呼。午後の労働を終え、夕食。点呼……。その繰り返し。
毎日毎日……。
毎日毎日毎日……。

老人

「どうしたんだね？…最近静かだねえ」老人が、俺に話しかける。
二段ベッドの下から。ここに来てまだ半年だったが、俺の精神は限界に近づいていた。

狭い部屋。絶え間なく聞こえてくる誰かの苦痛の叫び。

希望のカケラさえ、看守に踏みつけられる。唯一、窓枠から届く太陽や月明かりだけがまだ俺に生きていることを実感させた。
今夜も月が出ている。もうすぐ満月だ。

老人

「……はあはあ」また始まったか。

俺

「……」俺は無言で、薬を下の住人に手渡した。

老人は、一気にそれを飲み干し、しばらくして落ち着いた。

老人

「いつも悪いねえ。タケルさん……」

……。俺は依頼を受けていた。ある人間から。俺は、看守から受け取った薬を老人に定期的に与える。

それだけで老人は…死ぬ。

老人は、確かに病気で先は長くなかった。ただ、その時間すら待てない人間がいる。俺は、ただその時間を奪うだけ。

俺

「あんまり無理すんなよ。もう年なんだから」
偽善。

偽善。

偽善。

老人

「ありがとう…本当に…さあ」

涙を流しながら俺に感謝する老人。

バカが！いい加減気づけよ。

騙されてんだよ！！俺に。

クソが……………。

俺は、何かから解放されたかった。窓枠から外を見る。

月に照らされた地面に、一本だけリンゴの木がある。

もうすぐ実がなる。

俺は、俺は……………ダレ？

女

「それで…どうなの？」

静かに問う。

俺

「ああ。あともう少しだ」

この女は、どっかの大企業の社長。

女

「そう。なら…いいわ。ただ…あまり時間はかけないでね」

女の瞳には、何の色も伺えない。無。

俺

「分かってる」

俺たち二人の話を壁に立ちながら聞いていた看守が、クスクス笑う。よくもまあ…こんな人間ばかり作ったもんだ。神様も何考えてんだか。

俺

「一つ聞いていいか？どうして、あんな老人を」

女

「アナタには関係ないわ。口出しは無用よ」

…恐いねえ。

短い面会時間が終わり、俺は牢屋に戻される。

その間、看守とこんな話をした。

看守

「それにしてもたいした女だよな？ええおい」

その笑い声は、冷たいタイルに反射され俺の耳にこびりつく。

俺

「……………」

看守

「知ってたか？あの女」

【ジジイの娘なんだよ】

俺

「……………」

看守

「親が、重罪人だって世間には知られたくないらしい。まあ…なん
というか」

親も親なら、その子供も。

牢屋に戻る。

老人

「どうだった？」その長い眉毛を揺らしながら言った。

俺

「どうもしない」

老人

「あれ？てつきり…彼女さんかと思ったが」

どこまでも脳天気なジジイだな。娘に殺されようとしてんのに。

老人

「もうすぐ、リンゴが食べれるねえ」窓枠に身を乗り出して言う。

リンゴなんか…。

俺

「そうだな」

老人

「俺の願いなんだ。あのリンゴを食べること」

食べれないよ。アンタじゃ。ここから出れないんだから。

俺は、枕の下に忍ばせていた薬を見ていた。これは、死神を呼ぶ薬。

老人

「は…………… あ、はあ」

俺

「……………」

老人

「タケル…さん…薬…を」

俺

「……………」

俺は、ダレなんだ。ってか、なんでこんなことになった？
なんで…なんで…なんで…なんで…なんで…。

俺

「クソが…」

老人

「はあ…はあ…タケ…ルさん？」

老人が不信がつている。早く薬を渡さなければ。

……………。

頭が痛い。

老人の黒ずんだ手に薬を乗せる。

老人

「はあ…はあ…あ」

だが、老人はいつものように飲むとしなかった。
俺の顔をじつじつと…見ている。

俺

「……………」

老人

「…はあ…はあ」

老人は、その薬を流した。汚い洗面所から。

しばらくして落ち着いた老人が笑いながら俺に言った。

老人

「薬はもういらぬよ。タケルさん。俺はさ、アンタのそんな顔を見たくない」

どんな顔をしてる？俺。今。この割れた鏡では、それすらも分からない。

運動場からも見えるリンゴの木。老木のくせして、しっかり実をつけている。

真っ赤なその実は、偽物のようにテカって見えた。

やっぱり、叶わなかったな。じいさん…俺

「……………」

昨夜、突然発作に襲われ、そのまま死んでしまった。

あっけなく。

今は、この牢屋に俺一人。やけに広く感じる。

じいさんのベッドからは、写真が一枚出てきた。幸せを封じ込め。大事に保管されていたことが分かる。その写真は、俺には眩しすぎて見続けることが出来なかった。

俺

「？」枕に違和感を覚えた。持ち上げる。枕から、手紙らしいものが出てきた。

そこには、こう綴られていた。

【ありがとう。タケルさん。アンタには感謝してるよ。ここの地獄のような生活を耐えてくれたのは、タケルさんがいたからさ】

やっぱりアンタは、バカだ。殺したのは、俺なのに…。最後まで気づかないなんて。……………。

【タケルさんの目は、俺が出会った奴の中で一番優しかった】

俺が優しい？…なに…いつてんだよ…くそジジイ。

【タケルさん、俺の願いを叶えてくれないか？】

くそ！くそ！くそ！くそ！……………こんな手紙残して死ぬんじゃねえよ。くそジジイが……………。

俺は、手紙を両手で丸め、壁に叩きつけた。

胸から湧き上がってくる感覚に逆らうことが出来ない。
涙。

子供みたいに泣く。

この感じを俺は、忘れていた。

数ヶ月後、俺は出所した。あの女が、裏で手をまわし、俺の刑期を減らしたらしい。

女

「契約成立ね。さようなら」

門の前で待ち受けていた女は、一言俺にそう言つと去っていった。その後ろ姿からは、どこか寂しさを感じた。まあ…俺の勘違いか。

俺

「……………」

俺の上着のポケットには、あの時丸めた手紙がしっかり入っている。シワは、直らなかつたが…。

【見つけてほしいんだ。タケルさんの大事なもんを】

……………。

外からだど、もうリンゴの木は見えなかつた。

猫 19

猫

「見つかったの？大事なもの」

猫は、丁寧に俺の話の話を聞いていた。それだけで俺には、話す価値があつたと思えた。

俺

「……………」

猫

「まだ見つからないんだね」

バスが来るのが見える。

その時、突然胸に激しい痛みを感じた。

俺

「…そ…」なんなんだよ！この痛み。ヤバイ。

猫

「タケル？…その胸…」

俺のシャツがべつとりと赤く濡れている。それと同時に鉄臭い匂いが辺りに拡散する。

なんな…んだよ。勘弁してくれ。

今にも気絶しそうだった。バスから降りた客の悲鳴が、ゴワゴワと聞こえる。目の前が半分白くなる。

……………。

目を覚ました時、俺は白いベッドの上にいた。点滴の管が、手から伸びている。病院特有の消毒液の臭いがする。

震える指先で、胸を触る。着慣れていない服の隙間から。血は出ていない。傷らしい傷の感触もなかった。

じゃあ、いったいあの血はどこから…？

猫がいない。どこいった、アイツ。

目で追うが、まだ目眩がしていて焦点が定まらない。

点滴を無理矢理外し、ゆっくり立ち上がる。看護師や医者に見つか
らないように病院から出た。

……病院の外には、猫がいた。それと、…あの不思議な少年が。

不思議な少年

「病院では治せない病気もある」

俺

「なんで、…ここに来た？」

俺は、震える足に手を思いきり叩きつけた。痛みで、頭を覚醒させ
る。少しスッキリした。

猫

「私が呼んだの。……タケルには、この子が必要だから」

必要？という意味だ。

問題も分からなければ答えも分からない。

ただ一つなんとなく分かったことがある。俺は…あの時死んだとい
うこと。

猫20

公園まで行き、俺はベンチに腰掛けた。まだ多少息が荒い。

俺

「…お前なら治せるのか？これを」半ば諦めたように言葉を吐く。
不思議な少年

「ボクが出来るのは、死を防ぐことだけ。あとは、知らない」
…このガキ、いったい何だ？まったく…。猫

「…この子はね、私と同じ力があるの」

俺

「力？」

猫

「死を防ぐ」

ハハハ、なるほどね。俺を死から守ってくれるのか。

俺

「それは、ありがてえ。ぜひ、守ってくれよ。でも、なんか悪いな。
俺ばっかり得して」

最近じゃあ、猫は喋って、ガキが人の生き死にを決めるのか。変わったなあ…（ボ）時代も。

猫

「タケル！真面目に聞きな。これは、アンタの為なんだから」

俺の為？いつ頼んだよ、そんなこと。勝手に決めやがって！！

俺

「死なせるよ！あの時。なんで助けた？俺に対する恩返しのもつもり
か？迷惑なんだよ！」

空気が一気にピリピリ震える。通行人は、足早に公園を通り過ぎた。
それまで黙っていた少年の口が開く。

不思議な少年

「じゃあ、俺が今お前を殺してもいいんだな？」

俺が前にガキに言った台詞だ。

少年の白い手が、眼前にくる。少年がやるうとしていっていることが分かった。

猫

「止める。それ以上近付いたら、私が君を殺すから」

【タケルは、絶対に死なせない】

そうはつきり聞こえた。

少年は、俺から距離をとり、ジャングルジムに登り始めた。

か弱い体に見えるが、早送りのように登った。本当に人間か？コイツ。

俺

「まあ…俺の命を助けてくれんだよな？…」

あの、拳銃で撃たれた時も死んだはずだった。それが今もこうして生きているのは、コイツのおかげだ。

猫

「うん」

俺は、大袈裟にベンチから立ち、両手を広げ、黒猫を抱きしめた。

俺

「ああ…ありがとうよお。うええん」

猫

「シシャモみみたいな臭いするな。タケルは」

……………。

尻尾を掴み、放り投げた。

猫

「シヤ〜シヤ〜」

この時の俺は、何かを振り切るように猫と戯れた。

俺は、怖かったんだと思う。いつ、またあの 死 が俺を襲つか分からない。

今度も助かる保証はどこにもなかった。

俺の命は、この小さなガキともっと小さな猫に握られている。

猫 2 1

黒猫と病院服の男とガキ。変な取り合わせだ。人々の視線を何度も感じた。…まあ仕方ないか。

俺

「なんでさ、お前らはそんな力があるんだ？」

素直な感想だ。

猫

「私にもはつきりとは分からないけど…この力は…大事なものと引き換えにもらったんだと思う」
良く分からない答えだ。

俺

「お前は？」

少年

「僕は、時間と引き換えにこの力を得た」
(昔のことは覚えてない) そう、最後に付け加えた。……やはり、今の俺には良く分からなかった。ただ一つ分かったことは、コイツらは特別な力を得る代わりに何かを失ったということ。きっと、それは…。

俺

「予定狂っちゃったなあ。これからどうすつか」
もう今日のバスはないだろう。

宿の主人

「いらっしやい！あれ？…どうされたんです？」
当たり前前の反応だ。朝、出ていったばかりの客がもう戻ってきたのだから。少し…いや、かなり恥ずかしい。

俺

「また、頼むよ」

それだけ言つと、逃げるように部屋に滑りこんだ。

少年も連れてきた。コイツが、普通の子供じゃないことは分かっている。それに、ついてきたのはコイツだ。嫌なら、帰るだろう。まあ、帰る場所があればの話だが。

窓を開け、夜風に当たる。それだけで精神が安定する。その時に初めて、俺が今の今まで何かに怯えていたことを知った。

死とは何だ？

死神。

悪魔。

神……どれもすつきり当てはまらない。

死が見える気がする。触れられる気がする。曖昧なものじゃなく、はつきりとそれは存在する。

………なんか、宗教じみてきたな。考え方が。

俺

「……………寝る」

猫は、リモコンをいじっていた。ただ、上手くチャンネルを変えられないらしく、イライラしていた。少年は、部屋の隅でじつと何かを見ていた。そこには、壁しかない。

俺

「……………」

体が震える。…。

これからどうなるんだ。どこに行けばいい……………。

俺

「……………」

その時、懐かしい顔が頭に浮かんだ。俺の中は、闇がほとんどのスペースを占めている。これが俺が犯してきた罪だ。ただ、唯一の光だけが今も俺を支えている。その光をもう一度だけ…

猫22

もう何年も前に捨てた記憶。最近まで思い出すこともなかった。その記憶の前に俺は今立っている。何も変わらない。ここは。

猫

「ここがタケルの……」そう、ここで俺は育ったんだ。

ここへは、二度と来ないと思っていた。

公園：俺と春菜が遊んだ場所。毎日のように俺たちは、暗くなるまで遊んでいた。ブランコにそっと触れる。

俺

「……………」

すぐに昔が蘇ってくる。俺は、それが嫌ですぐにブランコから手を離れた。

それでも手に残る鉄臭さは消えない。

公園を後にし、町を練り歩く。

見慣れた一軒の民家がある。ワケの分からない草が生い茂り、何年も放置されていたことが分かる。猫

「タケルの家？」

少し聞きづらそうに聞いてくる。

俺

「違うよ。俺の家は、もうない。今は更地になってるし。この家は

……俺の……」

少年

「血の匂いがする」

鋭いな。やっぱり、特別なガキに違いない。そう、この家には血が染み込んでる。

猫

「…タケル？もう行こうよ」

俺の顔を見上げている猫。猫と目が合う。俺は、自然と狂気を帯びていたらしい。…ふう。参ったね。

俺

「そうだな」

空を見上げる。雲行きが怪しい。

【これでいいの】

俺

「いいわけないよ、春菜。俺は、あの時から前が見えなくなった」

轟く雷鳴。

停電。

それでも俺には、はっきりと相手が見えた。心配なんかして戻らなければ良かったんだ。今でも、後悔してる。

なんで、俺は……。

メガネをかけた男

「キミは、どうしたいの？」

僕

「助けたい。ただ、それだけだよ！」

メガネをかけた男

「うん。キミはそれでいい」

去り際に見えた男は、嬉しそうに笑っていた。

僕

「行かなくちゃ！」

僕は、走った。運動会でもこんなに真剣に走ったことはなかった。

途中、雨が降ってきた。

体から白いモヤが出ている。

僕

「はあはあはあ……」

家の中は、真っ暗だった。ドアを開け、中に入る。暗かったけれど、だんだんと目が慣れてきた。

扉が半分だけ開いている。その部屋から微かに人の気配がした。ゆっくりとその部屋に入る。

そこには、春菜ちゃんがいた。もう一人は、床を舐めるように倒れていた。

僕

「春菜ちゃん？あの……えっ？……なんで……」

春菜

「……………」

泣きながら、春菜ちゃんが

【ゴメンナサイ】

なんて言うから、僕まで涙が出たんだよ？

金属音がした。春菜ちゃんが持っていたものが手から落ちたんだ。

……………。

猫23

しばらく動けなかった。頭がぼやけて白くなる。

僕

「あの…えっ…」

まるで死ぬ寸前の鯉みたいに口が小さく上下する。

春菜

「タケルちゃん、ごめんね。私…わたし…」

あの春菜ちゃんが泣いてる。僕は、その時まで忘れていた。春菜ちゃんが、僕と変わらないただの子供だということ。

泣かないでほしかった。そんな顔は見たくない。

僕の視線は、床に吸い込まれた。倒れている人。僕は、その人を知っている。たまに挨拶されるから僕も挨拶を返した。

僕

「殺したの？お父さん…」

春菜

「……………」

声を殺している。

春菜ちゃんの周りの雰囲気ドロドロ崩れていく。それは、形のないゲロとなって僕を襲った。

尋常じゃない寒気が全身を這いずりまわる。

目の前にいるのは、本当に春菜ちゃん？あの、優しい春菜ちゃんが…こんなこと。

春菜

「タケルちゃん、お願いがあるの」

こんな声を聞いたのは初めてだった。こんなに近くにいるのに、耳に言葉が入ってこない。

春菜ちゃん

「忘れて…くれない？この事を」

僕

「わ…忘れるってコレを？」

僕には、無理だった。はつきりと分かる。ただ…

僕

「うん…」

僕たちの関係は変わってしまった。その時から。……………。

次の日、気になってもう一度春菜ちゃんの家に行った。でも、春菜ちゃんはいなかった。…死んだ人間も。どこに消えたとかは問題じゃなかった。僕は、ただ…春菜ちゃんを救いたかったのに。そのためならなんでもするつもりだった。一番大切な人だから！僕の…好きな人だから。

次の日もまた次の日も……………冬がきて…春がきて…夏、秋…そして冬がきた。

毎日毎日、僕は同じ道を走って春菜ちゃんの家に行った。貼り紙が玄関にあつた時は、そのつど破り捨てた。誰にも渡さない。ここは、春菜ちゃんの家だから…大事な…大事な家…帰ってくるから…。

大人の人に殴られたこともあつたけど、それでも玄関から先には行かせなかった。

何年か過ぎ、僕は俺になった。そして…忘れた。忘れることを身につけたから。

あんなに大事なものだったのに、今じゃ夢にも出てこない。

春菜…もうお前には、二度と会えないんだな。分かってるんだ、そんなこと。

だけどさ、それでも俺はもう一度だけ…お前に……………
…今更なんだってんだ。あゝくだらねえ

猫24

くたびれた街。常に私の鼻には、下水のような臭さがくきまどつていた。

「ここは、どこ？」

私は、ダレ？

分からない……何も思い出せない。

歩いていると、お腹がすいた。でも食べるものがない。だから盗んだ。知らない家に忍びこんで。

何してるんだろう？

私……わたし……わたし……。

私は、猫という生き物らしかった。誰に教えてもらったわけじゃない。だけど、知ってる。なんでかな……。いい香りのする女に、猫ちゃんと呼ばれた。たまに、タマと呼ばれる。私の名前……なまえ……分からないや。

ある日、男に会った。知らない男じゃない。たまに、見かけるヤツ。

男

「寒い？」

「……。なんで私に話しかけるんだろう。」

私

「……普通」

凄く驚いた様子の男。なんで？

男

「……寒い？」

私

「しつこいんだよ！人間野郎」

正直、私はパニックを起こしていた。なんで、この男は私の言葉が

分かるんだろう。同じ猫だって、私の言葉は分からないのに…。
男と別れた後も私はずっと考えていた。
初めて、言葉が通じた。言葉が…。

涙が出た。…止まらない。その時、新しい匂いがした。とても優しい匂い。涙の匂い…。

もう一度、会いたいその夜、見た夢を私は覚えている。覚えていることなんて何にもないはずなのに…。その夢は、変わっていた。夢だから仕方ないんだけど。

あれ？人間だ。私が人間？…へえ、二本足で立つのもいいね。なんか頭がフラフラ揺れるけど。

顔は見えないけど、小さな人間が私の目の前で寝ていた。小さな息づかいが聞こえるから死んではいない。

私

「……………」

あれ？声が出ない。

しかも、動けない。だからずっと、寝てるのを見ていた。

……………不思議な夢。

次の日、いつもみたいに餌を探しに出かけた。街中をユラユラ歩く。まだ私の頭は考えていた。昨夜の夢を。なんで、あんな夢を見たんだろう。

私

「あれ？」

道を外れた草むらに人が倒れている。昨日の男だった。ドキドキする。……………どうしよう。……………。何度もその道を行ったり来たりした。私には、関係ない！関係ない…。

男

「何してる？バカ猫」

私

「アタのヤスリみたいな顔で爪研いでる」

……………。

男は、無愛想に立ち上がると歩きだした。どこに行くのかな？きつと、コイツの巣に帰るんだろう。

私は、男の巣まで付いていく。別にやることなかったから。ただ…それだけ。巣の中は、さほど汚くなかった。私よりも綺麗な巣だった。……………なんかムカついた。

男が、何かわめいている。どうやら、怒っているらしい。散らかった巣は、やっと私の巣と似る。満足。フフン！

男は、少し高い場所で寝てしまった。寝息が少し苦しそうだった。

…病気かな。死ぬの？コイツ。ふう〜ん。

私

「……………」

散らかった部屋に私と人間。

だんだん眠くなってきた。いつもなら、まだ眠くないのにな。夢だと分かる夢。

また、人間の姿になっていた。

やった！なんか嬉しい。

でも、夢なんだよね…。

目の前には、やっぱり寝ている人がいた。あれ？でも前見た人と違うや。ってか、アイツだ。まだ、鼻をムズムズさせながら苦しそうに寝ている。この男は、面白い。私が人間になったら、きっと凄く驚くだろう。まあ…夢の中だけだね。起こそうかな。声は出ないけど今度は動ける。私は、男に近づいた。その時、

男

「……………春……………菜」

！！！！！！！！！！

全身に電気が走った。

私

「……………」

なんか、分からないけど凄く驚いた。胸の真ん中が風船みたいに軽くなる。なんだろう、コレ。

私は、男から離れた。足先に物が当たる。痛かった。夢なのに…変な夢。

私は、男の巣を綺麗にした。やることなかったから…ただそれだけ。あれ？…でも、私…なんで掃除なんて知ってるんだろう。……………。人間になって初めて分かる。私たちとは違うことを。人間がどれだけ優秀かを改めて知った。だって、両手でなんでも出来るもん。

あっという間に、巣は綺麗になった。なんか疲れた。夢なのに…疲れるなんて……変なの…。床に猫みたいに丸まった。やっぱり、これが一番いいや…zzz

猫26

猫で良かったことがいくつもある。その一つは、どんな狭い場所でも出入り出来ること。体が柔らかいからさ。もう一つは、匂いに敏感なこと。人間には、分からない微かな匂いも私にしっかりと主張してくる。アイツの匂いを追うことも簡単。

私

「……………」

何してるんだろう。漆黒の闇に複数の人間。もう少し近づこうかな……うん……やっぱり止めよう。アイツが知らない人間たちに何かを渡していた。

チラッと見えたアイツの顔は、凄く恐かった。なんで、そんな顔をするの？

嫌い。

……………。なんでかな。こう、胸が痛いんだよね。

アイツは、さっさとどこかに行ってしまった。残された人間たちは……………本当に人間？

死骸に群がるネズミみたいだ。

吐き気がした。

私は、クルツと回って走る。

でも、すぐにアイツの後を追う気にはなれなかった。商店街を意味もなくダラダラ歩く。

その時、どこからか声がした。振り返っても何も無い。

私

「？」

.....。
誰もいない商店街は、野良猫や野良犬の溜まり場になっている。
でも、今夜はそれすらもない。不自然だった。

メガネをかけた男

「静かでいい場所だね」

透き通る声で、話しかけられた。私は、すぐに声の主を探した。
だが、いない。
どうして？

私

「どこにいるの？」

メガネをかけた男

「どこにもいない。僕は、影だから。見ることはできない」

私

「カ...ゲ？なんで、私に...」

こんな体験は、初めてだった。どうしていいか分からない。

メガネをかけた男

「もうすぐ、君の大事な人が死ぬ。もし、助けたいなら自分を思い出すことだね」

思い出す？何を思い出すんだろう。

【君は、まだ本当の自分を知らないから】

そう、聞こえた気がした。もう声はしない。

私は...私は。

大事な人...。

そう言われた時に、アイツの顔が頭に浮かんだ。

なんか、嫌な夜だなあ

時間が戻る。

死んだはずの彼。

.....

私は、人間？

分からない。だって、人間の記憶がないから。でもね、こんな私でも覚えてることはあるよ。

それは、声だったり、手の温もりだったり。とても良い思い出.....
だと思う。今でもそれは変わらない。どんな姿になっても、どんなに私が変わっても。

【タケルちゃん、起きて】

彼は、面倒臭そうに起きた。やっぱり生き返ったんだ.....。あの人の言っていたことは正しかった。
良かった.....。

本当に良かった。

私は今、とんでもないことをしているのかもしれない。
死ぬはずの人間を生かしている。こうやって。きつと、いつか、近いうちに私は。罰を受けるだろう。これは、いけないことだから。
本当は、やってはいけないこと。

旅に行った。タケルと二人で。タケルに正体がばれるんじゃないか。
そんな不安を掻き消すように、私はこの時間を楽しんだ。

でもね、分かってたんだ。もう、終わりが近づいていること。
タケル.....ちゃんと、また離ればなれになるって。そして、今度こそ、

二度と会うことはない。

こうやって二人でいられるのもあと少し。
タケルがいない時、私は隠れて泣いていた。涙を上手く拭けないから、畳を汚しちゃったけど。

帰ってきたタケルちゃんは、それを見ても何も言わなかった。やっぱり、優しいね…。あの時から、何も変わらない。

なんで私は、こんな姿なの？

こんな姿で…。

鏡に映る黒い猫。

…。

私の罪。

人を殺したこと。

お父さんを殺した。

でも、でも、でも仕方なかった…。

ああしないと私…私。

消えてしまうから。

薄暗い部屋。

どこからともなく甘い香りが漂ってくる。…。

しばらくして、それが私の体から出ていることに気づいた。私の目の前には、獣のように醜く歪んだ男がいる。父と呼ばれるこの男は、必死に私の体を舐めていた。……………私は、いつものように天井を見つめ、止まった時間が動き出すのを待つ。この時ほど、時計のカチカチする音が恋しいと思ったことはない。

父

「はあはあ…やつぱり、素敵だな。春菜は」

私

「……………」

雨音が聞こえる。横目で窓を見ると、雫がだらしなく垂れていた。

父

「……………」

父は、無言になると行為に没頭した。私は、口を塞がれ息が苦しくなる。

私

「お…とう…さ、……………やめて」

私のか細い声は、父の耳には届かない。

一時間ぐらいして、ようやく私は、この地獄から解放された。父は、ティッシュを取ると、そっと私の目から出ているものを拭いた。その顔は、いつものあの穏やかな父の顔だった。

父が部屋を出ていった後、私は一人で後始末をする。……………。

私は…どんな顔をしてる？

鏡を見る勇氣は、私にはなかった。

良く見ると、私の体には消えない跡が付いていた。どんなにこすっても落ちない汚れ。

私の目からは、さつきようやく止まった涙がまた溢れていた。目を閉じる。

タケルちゃんの笑顔が浮かんだ。とても優しい笑顔。大好きな……。私は、勉強机に向かうとノートを開いた。何かを振り払うように、時間も忘れ、勉強に集中した。

.....。

母

「はるゝ、ご飯よお。いい加減、降りてきなさい」

一階から母さんの声が聞こえた。何度目かによく気づく。

一階では、父さんと母さんが仲良く並んで座っていた。笑顔で私を迎える。テーブルを囲む親子三人。とても穏やかな時間が過ぎていく。

笑い声が絶えない家。理想的な家族。ただ.....私は分からなくなっていた。

【ワタシはダレ？】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8005c/>

猫の手紙

2010年12月16日02時33分発行